

## パリで「笑う男」を観た人の感想

フランス八重奏団 (Octuor de France) のシネコンサートを見に、聴きに行った。会場には演奏者の座席とピアノ、そして、スクリーンが演奏者と重ならないようにセットされている。

モノクロ無声映画に生演奏がバックミュージックのように重ね合わせたものなのだろうと思っていたが、上演が始まるやその予想は裏切られた。いやむしろ、それに気が付いたのは上演が終わってからであった。映像が流れる。演奏が始まるが、聴かせようとしないう主張のない音楽。そこに奏者を感じない。音楽と映像がこれ以上ないほど自然に一体となりひとつの作品として現れる。この一体感にぐいぐい引き込まれ、観ている自分も一体となり、時に胸に熱いものも込み上げ、時間が過ぎていく。映像だけではない、また、音楽だけでもない、それぞれが絶妙なバランスを持って提供された時でしか描けない世界がここにはある。

想像を超えた初めての体験だ。

映画館で単に映画を観ているのとは違って、オーケストラによる演奏はやはり臨場感が異なり、スピーカーという音響フィルターを通さずに体感できる生演奏は、笑う男のストーリーをいっそう盛り上げてくれました。

(私は、感動して思わず何度か涙ぐんでしまった程です！)

無声映画だからこそ、観客の個々の感受性により〈想像〉出来る広がりがある気が致します。(現代の映画ですと、監督の思いを細部まで表現できてしまい、観客の想像の余地、例えばひとコマを観て、感情とか、画面に入らない風景を想像する自由が限られるのではないのでしょうか)

人間愛溢れる愛情豊かな作品だと思いました。

配役がぴったりで、〈演劇風〉演技(善人は善人らしく・悪人は悪人らしく、それに喜怒哀楽など)が、観客を引き込むのではないかと思います。

(私の理解力が乏しいせいですが)、女伯爵がグウィンプレインと婚約するにあたり、元フィアンセ?の位置付けがいまいち分かりませんでした。(それで、機会を見てユゴーの原作を読むことにしました)

何しろとても感動的で、曲自体は言うに及ばず L'Octuor de France の演奏が相俟って素晴らしかったです

まず約 100 年前の映像で始まった古き良きヨーロッパの映像に感心し、美しい時代だったなあと遠くの世界に見ていましたが、本編と演奏が始まり観ているうちにその世界はこの今になり、言葉の説明が少ないからこそ、それぞれの役者の醸し出す喜怒哀楽、と嘲笑の酷さや笑う男の苦しみも切実に伝わってきて心に突き刺さりました。

またいくつものシーンに自然と流れる演奏の音色も、あの世界をこの今へ息づかせる、映像との素晴らしいハーモニーでした。

後からストーリーをインターネットサイトで日本語で知りましたが先に読んでおけばさらに理解ができたのでよかったなと思いました

Victor Hugo 原作である映画『笑う男』はモノクロ・無声映画であり、俳優の演技方が舞台俳優のような表現であることや、モノクロであるがゆえに鑑賞者による各々の色のイメージが委ねられていることもあり、切り取られた映像に豊かさを感じました。ピエロとして口に手術を施され日々人々から笑いものとされ、悲しみに暮れる主人公の姿と彼を支える盲目の少女と逃れることのできない境遇である二人の静かな愛は、ガラスのように壊れやすく、それ故にこの物語を儚く美しく繊細にしている印象を受けました。シネコンサートの L' Octuor de France による質の高い演奏がこの映画に加わることで、この映画が輪をかけて深みを帯びたように感じました。

仏人の彼は元々、古い時代の有声映画(白黒)をよく見ている好きなのだそうです。

無声映画は各自が字幕セリフを見ながらイメージを膨らませることが出来る良さがあるのだが、生演奏で目の前で映像に合わせた音楽を音声の代わりに

聴きスクリーンで見られた経験はとにかく素晴らしかったとの事でした。現代人に是非見て欲しいと。

まず約 100 年前の映像で始まった古き良きヨーロッパの映像に感心し、美しい時代だったなあと遠くの世界に見ていましたが、本編と演奏が始まり観ているうちにその世界はこの今になり、言葉の説明が少ないからこそ、それぞれの役者の醸し出す喜怒哀楽、と嘲笑の酷さや笑う男の苦しみも切実に伝わってきて心に突き刺さりました。

またいくつものシーンに自然と流れる演奏の音色も、あの世界をこの今へ息づかせる、映像との素晴らしいハーモニーでした。

後からストーリーをインターネットサイトで日本語で知りましたが先に読んでおけばさらに理解ができたのでよかったなと思いました